

ホントの恋を教えてください。

目次

ホントの恋を教えてください。

5

番外編 愛しいひと

269

ホントの恋を教えてください。

第一章

「だからさ蓮見さん、食事だけでもつきあってくれないかな」

多分、断られるとは思っていないのだろう。目の前の男からは自信に満ちたオーラが感じられる。しかし依里佳にとつてそれは、ただただ息苦しいものでしかない。その圧に耐えられず、思わず目を伏せてしまう。

「すみません、その日は予定が入っていて……」

誰もが目を奪われる印象的な瞳は、憂う様でさえ人目を引く。左の泣きぼくろの上に来た長いまつ毛の影にすら惹かれる者がいるほどだ。

その男も例外ではなく、彼女の何気ない仕草に見惚れているようだった。

「来週の金曜日は？」

「……その日も無理です」

「じゃあ、いつならいいの？」

「……ごめんなさい、行けません」

依里佳は困ったように笑い、小声で言う。そして軽く頭を下げるなり、目の前の男に背を向けて

足早にその場を離れた。

「蓮見さん、また男の人振ってる。しかも技術研の高塔さんだよ」

「自分がモテるって見せつけないんじゃない？」

「蓮見さんの本性知らないのかねー、技術研の人たち」

後ろの方で、女性たちの好き勝手な言葉が飛び交っている。それを耳にした依里佳は肩をすくめた。

（別に見せつけないわけじゃないし！）

依里佳は桜浜市にあるIT企業で営業として働くOLだ。書類を他部署に届けに行った帰りの廊下でいきなり呼び止められ、食事に誘われたのだ。言われてみれば彼は技術研究所の高塔——と名乗っていた気がする。その名前は依里佳も聞いたことがあった。社内の花形部署、技術研究所のイケメンらしい。

だからと言って知りもしない相手と二人きりで食事など行けるわけがない。だから謹んでお断りした。

たったそれだけのことなのに、この言われよう。

（もう慣れちゃったけど！）

依里佳は軽くため息をついた。

二十四年間生きてきて、このように知らない男性からいきなり誘われる経験は初めてではない。

そして、同性の同僚たちが自分を見てせせら笑っている場面もまた、初めてではない——というよ

り、依里佳の入社以来、ずっと続いている。

「じゃあ私の本性知ってるんですかねー？ あんたたちは」

「ひえっ」

突然耳元で囁かれ、思わず変な声を上げてしまった。

「——って、言つてやればよかったのに」

「……なんだ、美沙か」

社内では数少ない『依里佳の本性を知っている派』の一人——同期の及川美沙が、とぼけた言葉とともに彼女の顔を覗き込んだ。

「『男を手玉に取つて喜んでる尻軽』なあんて、言わせていいの？」

「……もう、ほんと諦めてる」

依里佳はすねたようにくちびるを尖らせた。

「諦めたらそこで試合終了なのに——」

美沙が某スポーツ漫画の名言を引用して依里佳を励ます。

「そんなこと言うけどさ、美沙！ 私が何を言つたところで、ぜんっぜん信じてくれないんだよ！？」

あの人たち！」

美沙に縋りつくような勢いで依里佳は言う。

そう、自分が決して彼女たちの思うような女ではないことを理解してもらおうと、依里佳なりに頑張つてはみた。何度か直談判もしてみたけれど、それを素直に信じてくれるような生易しい女性

たちではなく。

説得を諦めた依里佳はエネルギー節約のため、以来、多少のことでは自分の弁護をしなくなった。その代わり、彼女たちに中傷されても無視を決め込むだけの凶太さが身についた。今では仕事に支障をきたしかねない時に限つて、それなりに反論することになっている。

「まあ、自分たちが普段から敵と見なして蔑んでる女が、実はぜんぜん男っ気ない生活を送つてます、つて知つたら目玉飛び出るかもね。……あ、そんなことないか、男の子っ気はあるし」
クスクスと笑いながら、美沙が依里佳の脇腹をつついた。

「ちよっ……やめてよ！」

身をよじつて彼女から逃れた依里佳の胸ポケットから、ペンが落ちて転がつていく。それは彼女たちの背後を歩いていた人物の靴に、コッソ、と当たつて止まった。

「あ……すみません！」

依里佳が慌てて拾おうとすると、大きな手が視界に入りペンを取り上げる。手の行方を辿るように見上げると、そこには満面の笑みを湛えた顔があった。

「どうぞ、蓮見さん」

キラキラをまとつた長身の男がペンを差し出してくる。依里佳はそれを受け取つてお礼を言った。
「ごめんね、水科くん。ありがとう」

「いえいえ、失くさなくてよかったですね」

あくまでも笑顔を絶やさないその男は、右手を振りながら依里佳たちの横をすり抜けて行く。

「水科くん、相変わらず愛想いいわね」

美沙が感心したように言った。

水科篤樹は依里佳と同じ二十四歳だが、一年後に入社した後輩社員である。若手俳優のように甘く整った顔立ちで、瑞々しく爽やかな雰囲気をもった美形だ。入社当時から変わらない愛想のよさを持つ好青年でもある。

その上、平均よりかなり高い身長、有名私立大学出身という頭のよさ、若手ながらやり手と評される能力の高さで、女性社員から人気を博していた。

「水科くん、蓮見さんに何か変なこと言われなかった？」

「気をつけた方がいいよ？ あの人尻軽だし」

「あんな人に関わったら、水科くんまで変な噂立つちゃうよお？」

声に釣られ振り返ると、さつき依里佳を悪し様に言っていた同僚——佐々木、井上、そして高橋の三女子が水科を捕まえて、あれやこれやとアドバイスしていた。

彼女たちは、依里佳にとってはもはや『天敵』のようなものだ。

一年先輩の佐々木と一年後輩の高橋は、依里佳と同じ部署、そして同期である井上は隣の部署に所属している。年齢はバラバラだが、いつも三人仲良く固まっていることが多い。

依里佳は今の部署に配属された頃にはすでに、何故か彼女たちから目の敵にされていた。三女子曰く、蓮見依里佳とは『何の努力もしていないのに、男にちやほやされて調子に乗っているふしだらな女』なんだそうだ。薄っぺらい悪口だが、当の本人にとっては、それなりに攻撃力の高い言葉

である。日々、地味に精神を削られていた。

「ちよっと、あんたた——」

あまりの言いようにさすがの美沙も呆れ果て、口を開きかける。と同時に、水科が急に弾んだ声で、彼女たち呼びかけた。

「そんなことより、もっと楽しい話しません？ ……あ、そうだ。俺の間、友達とすっごい美味いパンケーキ屋に行つて来たんですけど。半額クーポンたくさん貰ったんで、お裾分けしますよ」

「あ、あたしパンケーキ好き」

「え、どこどこ？ そのお店」

「水科くん、今度一緒に行こうよお」

水科が女性たちの背中を押し、依里佳たちから離れて行った。

「上手く話逸らしたわね、ナイス水科くん。露骨に庇つたりしたら、あの人たち余計に依里佳のこ」と目の敵にしちゃうもの」

後輩のスマートな対応に、美沙が目を見張る。

確かにあれは依里佳のために話を逸らしてくれたのだろう。そういう声色だったのは、彼女にも分かった。でもわざとらしく思われない絶妙なニュアンスで三女子の注意を引いていた。

「いいなあ……」

依里佳は水科の背中を見つめながら呟く。おそらく美沙にすら届かなかっただろうその小さな本

音は、ごくごく自然に口をついて出た。

水科が皆に分け隔てなく愛想を振りまいても、『誰にでも媚を売っていやらしい』なんて言う人はいないのに——依里佳は彼を心の底から羨ましく思う。

そういう意味での『いいなあ……』だった。

依里佳の所属する営業企画部の十七階フロアの端っこに、その書類倉庫はあった。少し埃っぽい室内の奥に、かなり古い資料が収納された棚がいくつか並んでいる。その棚の後ろに、小さな扉が隠されているのを知る人間は、ほとんどいないだろう。そもそも倉庫に立ち入る社員自体がまれで、古い棚を指す人間は皆無と言っていい。

水科の後ろ姿を見送った後、廊下で美沙と別れた依里佳は、さも用事がありますと言わんばかりの態度で倉庫に入った。慣れた手つきで棚をどかし、扉をくぐる。配線スペースを少し歩くと、上に向かう鉄骨階段が現れる。依里佳はカンカンと靴音を響かせて二階分を上って行った。一番上にもう一つある分厚い鉄扉を開けるや否や、ビュウツと音を立てて風が入り込んでくる。

その勢いに目を細めた依里佳が外に出ると、途端に視界に広がる、青、青、青。朝の天気予報で今日は快晴と言っていたけれど、まさにその通り。

抜けるような青空が、そこにあつた。

——十八階建ての社屋の屋上だ。

高さ三メートルほどのフェンスに囲われたそこは殺風景でもの淋しく、普通の人なら立ち入ろう

とさえ思わないだろう。

風を全身に受けながら、フェンスのところまで歩いて行く。端まであと二メートルというところで立ち止まり、足を肩幅程度に開いた。両手を口の両側に添えて深く息を吸い込み、そして——

「バカヤローー!!」

依里佳は渾身の雄叫びを上げた。

「私は尻軽じゃなあー!! い!! ごくごく普通の女子なんだからああああ!! 男を弄んだことなんて、一度だってなああああ!!」

さらに絶叫は続く。

「好きでこんな顔に生まれたわけじゃなああああ!! っていうか、あんたたちは私が尻軽だって証拠でも持ってんのかって言うんですよ!! 私のこと、これっぽっちも知らないくせにいいい!!」

肩で息をしながら、依里佳は心に溜め込んだ涙を吐き出すように声を張り上げる。ここでは何をさげんだところで、誰にも聞かれないから安心だ。

「……はあ、スッキリした」

満足げに笑むと、依里佳は急いで元来たルートを引き返す。まだ就業時間なので、あまり長く席を外すわけにはいかない。棚の位置を戻すと、素知らぬ表情で部署まで戻った。

この会社に入ってから二年が経っているが、依里佳は入社当時から何かと目立つ存在だった。

それは彼女がかなり容姿に恵まれた女性であるためだ。

少したれ気味の大きな瞳。二重まぶたを縁取るまつ毛は濃く長い。そしてその目の魅力を引き立てるように存在する泣きぼくろ。それほど高くはないがツンと尖った鼻、ふっくらとしたくちびる——コケティッシュで、いかにも男好きのする顔立ちだ。ダークブラウンのショートボブヘアは、ともすればルーズになりがちな彼女の印象を引き締めている。スラリとした肢体はほどよい曲線を描き、そこからほんのりと漂っているように感じられるフェロモンも、男を惹き寄せる要因だろうか。

そのためか、依里佳は入社後すぐに男性社員の間で話題となり、アプローチを受け続けてきた。そしてそれを妬んだ一部の女子社員からいわれの無い中傷を浴び続けて現在に至る。

けれど依里佳は、今まで一度たりとも社内男性とつきあつたことはないし、ましてや弄んで覚えもない。

過去に彼氏と呼ばれた存在だつて二人しかいなかった。自分から好きになった人が依里佳を選んでくれたことなど、今まで一度もない。過去に好意を寄せた男性は皆、彼女とは真逆のルックス——決して派手ではない、ふわふわとした綿菓子のような女性を好んだから。

自分に言い寄る男の大半は、依里佳の華やかな見た目だけで中身を判断し『男慣れしていて小悪魔的で自信に満ちた女性』だの『恋人としては最高だが結婚相手には向かない女』だのと思ひ込んで接してくる。

そして本当の彼女を知ると、決まつてこう言うのだ。

『君がそんな人だとは思わなかった』

勝手に『理想の蓮見依里佳像』を作り上げたくせに、まるで騙されたような顔をしてこちらを責めるから、彼女はその度に傷ついてきた。

(私だつて、こんな派手な見た目に生まれたくなかった)

何度そう思ったことか。もちろん、そんな台詞を口にしてしまえば、他の女性から要らぬ反感を買ふことは分かつているので、黙して語らないでいるけれど。

そもそも依里佳はルックスにこそ華はあれど、性格はそれに反比例している。決して暗くはないが、どちらかと言えば地味だ。注目されることは好きではなく、芸能界にスカウトされたこともあるが、すべて断つている。むしろ某少年漫画に登場するラスボスの口ぐせのように、『普通に、静かに暮らしたいの!』と、常々言っている。

自分の性格にこの器は、とても釣り合っていないと思うのだ。現に、彼女をよく知る友人に言わせると、依里佳は『王室御用達ブランドの高級クリスタルシャンパンフルートに、ペットボトルのお茶を入れたような女子』なのだそう。要は『中身は地味である』と言いたいのだと思うが、『ペットボトルのお茶美味しい! 私が好きだよ!』

と、的外れな反論をしてしまった依里佳だった。

「えくりか! 今日帰りにパンケーキ食べてかなあ? パン・ケ・エ・キ! 水科くんから半額チケットもらったんだよ。ありがとねえ、水科くん!」

水科に向かって大きく手を振りながら、松永ミッシェルが依里佳のもとに小走りで寄つて来た。かなり大きな声を出しているのは、おそらく例の三女子に当てつけているためだろう。

(美沙から聞いたのかな?)

ミッシェルは日本人とアメリカ人のハーフだ。依里佳と美沙とは同期入社で、依里佳とともに男性社員の話題をさらった美女でもある。ポーランド系アメリカ人の母親の遺伝子を色濃く受け継いだ彼女は、本来潜在性(せんせい)遺伝であるはずの青い瞳が一番の特徴だ。日本生まれ、日本育ちながら、見た目でいろいろな思いをしてきたせいか、依里佳と苦勞を分かち合う仲でもある。

社内で嫌な思いをすることがあれば、美沙も含めて三人でフォローし合ってきた。だから、ミッシェルがこうして自分を庇(かば)ってくれているのを見て、『そんなミッシェルが好き!』と心で絶賛しながらも、依里佳は申し訳なきように手を合わせる。

「あー……ごめん! 今日(けふ)は翔(かひる)と一緒に映画観る約束してるから」

「あはは、そっかあ。翔くんならしょうがない! よろしく言つといて」

翔——依里佳の甥(おひ)の名前を聞いたミッシェルは、納得したとばかりに彼女の肩を叩いた。

「うん、また誘(よび)って! じゃあ私、帰るね!」

依里佳はミッシェルに手を振り、職場を後にした。

「あれ、蓮見さん、お疲れさまです。蓮見さんも、北名(きたな)吉(きち)駅(えき)を使(つか)ってたんですか?」

まさかこんなところで彼の顔を見るとは。依里佳は自分の目が信じられず、ばちばちとまばたきを繰り返した。

「う、うん……東口なの。水科くんも?」

「そうなんですか、俺は西口なんですよ。今まで会(あ)ったことなかったですよね?」

ミッシェルの誘(よび)いを断(きり)って帰途(きこ)についた依里佳は、会社のある桜浜(さくらば)駅(えき)から各駅停車(かくえきてんしゃ)で十五分の地(ぢ)元(もと)駅(えき)——北名(きたな)吉(きち)に着(き)き、電車(でんしゃ)を降りてすぐに水科(みづの)と出(で)くわした。

彼の言う通り、今まで一度も会(あ)わなかったのに、依里佳は水科(みづの)が自分(おれ)と同じ駅(えき)を利用(りよう)していたなんてまったく知らなかった。

ここにはさすがに例(れい)の三女子(さんむすめ)の目(め)もないので、そのまま一緒に改札口(かいさつぐち)へ向(む)かう。

「あ、水科(みづの)くん。今日はありがとう。佐々木(ささき)さんたちの話(わ)話(わ)、逸(そ)らしてくれて」

「ああ……あれ、結構(けつこう)えげつなくて聞くに堪(た)えなかったんで。蓮見(れんみ)さんのためと言うより、自分のためでしたよ」

「でも、嬉(うれ)しかったから。ありがとう」

本当(ほんとう)は、嬉(うれ)しいというより羨(うらや)ましかったんだけど——こんなことを伝(つた)えたところで水科(みづの)が困(こ)ってしまうと思(おも)い、あえて本心(ほんしん)は言(い)わなかった。それくらいの気遣(きづ)いは心得(こころえ)ているし、嬉(うれ)しかったのも嘘(うそ)ではない。

「俺(おれ)も嬉(うれ)しいです」

「え?」

「こうしてめずらしく、蓮見(れんみ)さんが俺(おれ)に話(わ)しかけてくれたから。いつもは業務連絡(ぎふりょくれんらく)以外(いがい)で、声(こゑ)かけ

てくれないじゃないですか」

「それはほら、私が話しかけると、水科さんに迷惑がかかるかな、って思ってる」

社内の男性社員と気軽に会話しようものなら、三女子が目ざとく見つけては『媚を売っている』だの『色目を使っている』だのと言ってくるため、女子社員に人気な彼には下手に声などかけられないのだ。おまけに彼女たちは、管理職の前ではあからさまに罵（ののし）ってくるのがない分、タチが悪い。

「あははは、そんなこと気にしてくれてたんですか？ 大丈夫ですよ、俺はそんなの全然気にしませんし、彼女たちの発言についても何とも思っちゃいませんから。だからどんどん声かけてください。俺も蓮見さんと仕事の話とか、いろいろしたいです」

依里佳と水科は部署こそ一緒だが、グループが違うので仕事の内容も若干違う。直接関わることはあまりないが、お互いの業務について把握（はあく）するための情報交換も、時には必要だ。

「あ……りがとう。うん、これからは話しかけるようにするね」

「是非是非そうしてください」

そう言って水科が笑う。

「……？」

その笑みに少し違和感を覚えた。いつものぽあっと輝くような笑顔ではなく、しつとりとしていて、どこかほんのりと色気が漂（た）っているというか。

花で例えるならば、いつも会社で見ているのは開花したばかりのピカピカなひまわり。そして今

の表情は、咲きかけの白い牡丹（ぼたん）といったところか。繊細（せんさい）な花びらが幾重（いくえ）にも重なったつぼみがゆっくりと開いていくような、そんな笑みだ。とても色っぽく、見ていてドキリとする。

水科のこんな色づいた表情なんて初めて目にしたので、依里佳は思わず息を呑む。仕事の後でやや疲れた感じがそう見せているのだろうか。でもその割には妙に弾（は）んでも見えるような、なんだか不思議な雰囲気だ。

「もしかして、水科くんは今からデート？」

改札を出て東口と西口の分岐点まで来た時、依里佳は尋ねた。ところが水科は何を聞いているのだろうか。という表情で首を傾（か）げる。

「え？ どうしてですか？」

「えっと……水科くん、どことなく楽しそうだから、そうなのかな、って」

「いやいやいや。……それは、蓮見さんとこんなところで会えたからですよ。今日の俺すげえついで、って。あー……俺、これで一週間分くらいの運、使い果たしちゃったかも」

ふうわりとして、それでいて艶（つや）っぽい笑みから溜（も）みなく放たれたその言葉に、依里佳はくすぐったい気持ちになった。

（こういうこと、サラッとさえいっちゃうのってすごいなあ）

「水科くんって……女性を立てるの、上手だよな？」

「そうですか？」

「今日だって、全然角（かど）を立てずに佐々木さんたちの話を流して……だから人気があるんだね」

水科は入社時、まずその見た目で社内話題をさらった。スラリと高い身長、スタイルのよさを損なわない程度に鍛えられた身体つき。黒檀色の髪は自然な感じにスタイリングされ、おしゃれな印象をもたらしている。顔も芸能人だと言われてもおおかしくないほどに甘く整っており、かと言って彫刻のように冷たい雰囲気はない。

その上、誰に対しても嫌な顔を見せたことのない人の好きなのに、なめられない。これはもう、生まれ持った才能ではないかと依里佳は思う。

こうしてほんの数分話ただけで、水科が社内の女性に慕われている理由がよく分かった。「蓮見さんだって人気あるじゃないですか」

「え、私は……」

男性からは多少そういう風に思ってもらえているかもしれないけれど、女子には嫌われている自覚があった。

「あの三人が妙に絡んでくるから、女性社員には疎まれてるって蓮見さんは思ってるかもですが、実は女子にも人気あるんですよ。俺の同期の女子なんて、蓮見さんに憧れてる、って言うてましたし。きれいなのに全然驕ってなくて親しみやすい、って。……あれ、なんだか俺、上から目線になつてますかね?」

「う、ううん、全然!」

「佐々木さんたち、いつも蓮見さんについてあれこれ忠告してくれるんですけど。俺、蓮見さんをそんな風に思ったことないですし……こっそり援護しますんで。だから、もっと自信持つてくださ

い。味方はたくさんいますよ?」

「あ……ありがとう。そう言ってもらえると、気持ちが悪くなる」

水科に噂だけで判断されなかったのが嬉しい。

同時に、水科が女性にモテる美形というだけで、心のどこかで身構えている自分がいたことに気づいた。噂だとか見た目だとかで相手を判断していたのは自分も一緒だったのかもしれないと、少々反省する。

「じゃあ、俺こっちなので」

「うん、お疲れ様です」

水科と別れ自宅に向かった依里佳の心は、ポカポカと温かかった。

「ただいまあ」

玄関を開けた依里佳が家の奥に向かって声をかける。その数秒後、ドタドタと家の中を走り回る音が聞こえてきたかと思うと、足音の主が依里佳の首に抱きついた。

「おっかえりい、えりか!」

「つと、ただいまあ、翔……ちよ、苦しいから降りなさい」

両腕両足を自分の身体に絡ませてくる四歳児を、ギブギブ、と言いながらなんとか剥がす。

「えりか! あのね! きょうアニーがたまごうんだよ!」

瞳にキラキラと星をちりばめながら、ペットのカナヘビの産卵を報告する甥っ子に、依里佳は目

元を緩ませた。

「ほんと？ すごいね！」

「翔く、『りゅううさ』始まるよ！ あ、依里佳ちゃん、おかえり〜」

「ただいま、陽子ちゃん」

ダイニングから顔を出した義理の姉に応えた後、依里佳は自分にまどわりつく翔の手を取り、廊下を歩いて行く。

「えりか、『りゅううさ』のえいが、いっしょにみて？」

今夜放映される子供向けアニメと一緒に観てほしいと、翔は依里佳の服を摘んで引っぱり、彼女を見上げた。その視線には『おねがい♪』という可愛らしい意思がたっぷり込められている。

(可愛いつ……天使は地上にいる……！)

依里佳はデレデレと顔の筋肉を緩ませた。その愛らしい姿を見るだけで、今日一日の疲れが吹き飛んでしまう。

「もつちろん、そのつもりで早く帰って来たんだよ？ 荷物置いて手を洗って来るから、先にテレビ観てて？」

依里佳は実家住まいだ。ただし、現在の世帯主は八歳年上の兄・俊輔なので、彼女は兄家族と一緒に暮らしている。というのも、両親は依里佳が高校二年生の時に、交通事故でそろって他界してしまっただからだ。それ以来、実家で兄と二人暮らしをしていたのだが、それから一年半後、依里佳の大学入学が決まるのと同時に、俊輔と陽子の結婚が決まった。

『お兄ちゃん、私、家を出るね。新婚さんの邪魔はしたくないし』

と、一人暮らしを決意したのだが、依里佳を止めたのは他でもない、義姉の陽子だった。

陽子は俊輔の大学時代の同級生だ。よく家にも遊びに来ていたため依里佳とも顔なじみで、二人は俊輔抜きでも一緒に出かけるほど気が合った。

『だめだめ！ 依里佳ちゃんみたいな美人で可愛い子を、一人暮らしなんてさせられない！ お嫁に行くまではこの家で一緒に暮らしてもらいます！ いいわね？ 俊輔、依里佳ちゃん』

ちゃきちゃきの江戸っ子である陽子に反対出来る人間など、その場にはいなかった。

陽子はさっぱりとした性格を反映したような、くつきりとした目鼻立ちをした美人である。伶俐な瞳と、賢そうな薄いくちびるが印象的だ。

俊輔自身も依里佳の兄だけあって結構な男前だ。彼女とよく似たたれ気味な目は大きく、おっとりとした人の好きをより際立たせている。背も水科ほどではないものの、平均よりは高い方だ。

そんな二人は、妹の目から見てもお似合いのカップルで。そして当然、翌年生まれた彼らの息子である翔も、生まれた時から将来が楽しみになるほど、可愛らしい赤ちゃんだった。

こんな天使のような子がいていいのか、と思わず天に問うてしまうほど愛らしい甥っ子に依里佳は心を奪われ、それはそれは可愛かった。

陽子の出産直後は、疲弊した彼女に代わって出来る限りの家事育児をしたし、今でも空いている時間には面倒を見ており、翔の好きな幼児番組やアニメまで一緒に観賞している有様だ。映画も劇場まで観に行くし、翔のためにイベントの行列に並んだりもする。

そういった依里佳の溺愛^{でんあい}ぶりが実を結んだのか、翔は叔母によく懐^{なつ}いていた。今も翔はソファで依里佳の膝に座ったまま、アニメ映画を観ている。そこが二人でテレビを観る時の定位置だったりするのだ。

見返りを期待せずに自分を好いてくれる男は、もはやこの世で甥^{せう}っ子^こだけだと依里佳は思う。「あーえりか、またないてるー。しょうがないなあ、もう」

子供向けアニメを観てポロポロ泣いている依里佳に、翔がティッシュの箱を渡してくれた。「だって、だって……っ、うさぎが、うさぎがあ……」

二人が観ているアニメ、『もっこりゆうととんがりうさぎ』——通称『りゆううさ』は、雲から生まれた竜と水晶から生まれたうさぎが出逢い、一緒に旅をする物語だ。元々は絵本が原作だが、数年前からテレビアニメが放映されている。キャラクターの造形の可愛らしさとワクワクとドキドキが詰まったストーリーが子供たちだけでなく大人にも受け、今や国民的アニメとも呼ばれるほどの人気を誇っている。

その『りゆううさ』のみならず、依里佳は家ではいつも翔と一緒に子供向け番組ばかりを観ている。

だから同年代が観ているようなテレビ番組は、ここ四年はほとんど観ていない。翔が寝た後なら時間も出来るのだが、空けば空いたで家事を手伝ったり、お風呂に入ったり——と、結局観ないで終わることの方が多かった。

そのせいか、男性と二人で出かけてもまず話が合わない。

依里佳も年頃の女性なので、以前はちよつと気になる男性から誘われた食事やデートに出かけることもあった。

彼らは彼女の気を引こうと、皆一様に流行^{はや}りの話題を口にする。ファッション、ドラマ、バラエティ番組、デートスポット、レストラン、ヒット曲——けれど当の依里佳が、それについていけないのだ。

おそらくうんうんと話を聞いていれば、反応として間違いないのだと思う。実際、依里佳もそうしてきた。しかし彼女も流行にアンテナを張り巡らせていると当然のように思われているので、相手から好みや意見を尋ねられる。

もちろん、上手い反応など返せない。

ファッションはともかくとして、ドラマやバラエティ番組なんてほとんど観ないし、翔と出かけるのは公園かペットショップか動物園か遊園地、好きな食べ物B級グルメ、そして毎日聴くのはアニメソングか戦隊ヒーローもののテーマ曲だ。これでは会話など噛み合うはずもない。

一度など『私、甥^{せう}っ子とアニメしか観ないので……』と発言したところ、こんな反応が返って来た。

『蓮見さんがアニオタとか、何の冗談?』

『え……マジなの?』

『ちよつと……それはない』

そしてやはり『イメージと違う』と引かれてしまうのだ。

中には多少話が合わなくてもかまわない、と言う男もいたが、そういう場合は大抵あからさまに依里佳の身体が目当てだったので、彼女の方が拒否反応を示すこととなる。

自分が他の女性とかなり違う嗜好嗜好をしているのは、もちろん自覚している。けれど、こんな自分を変えたいとは思わないし、変えてまで男性とつきあいたいとも思っていない。

このままの自分を受け入れてくれる男の人がいればいいのに……と、考えることもあるけれど、それはなかなか難しそうだ。

(私、一生結婚出来ないかもしれない)

依里佳は半分、恋愛を諦めていた。

「依里佳ちゃん、翔、夕飯出来たよ。食べよう」

陽子がダイニングから依里佳たちに声をかけてきた。

「あ、陽子ちゃん、お手伝いしなくてごめん」

「いいのいいの、翔のこと見てもらってるし」

陽子の仕事は弁護士だ。しかし翔がもう少し成長するまではと業務量をセーブし、基本的には在宅勤務をしている。なので今は蓮見家の家事の半分以上を彼女が引き受けていた。

依里佳も週末など、出来る時にはちゃんとやっているが、平日の夜は翔の相手をするだけが多かった。

「翔、お手で洗ってきて。ご飯だよ」

膝から翔を下ろして床に立たせる。

「やだあ、これまだみたい」

「録画してるから、夜ご飯食べたら続き観よう？」

依里佳が目線の高さを合わせてそう言うと、翔は『わかったあ』と、しぶしぶ洗面所へ行った。(なんだかんだでちゃんと言うこと聞いてくれるのが、また可愛い……！)

ニヤニヤしながら翔の後をついていく依里佳の姿は、端はたから見ると相当薄気味悪いだらう。そう自覚しつつも、叔母バカを抑えるつもりは毛頭ない依里佳だ。

(翔が可愛すぎるのがいかにのよ！こんなに可愛い幼稚園児いる!? 園でも女の子にモテるんだろくなあ)

そんなことを考えながらポテトサラダを食べる依里佳に、突然陽子が切り出した。

「そういえばね、叔父さんが今度こそお見合いはどうか、って聞いてきてるんだけど。依里佳ちゃんみたいな美人さんがフリーなんて！ っ、また張り切ってるのよねえ」

依里佳は口の中のサラダを呑み込んだ後、申し訳なさそうに答える。

「……ごめん、陽子ちゃん」

「だよねえ。大丈夫だよ、断っておくから」

「いつもごめんね」

「気にしないで！ 私だって、大事な義妹いもの依里佳ちゃんには、望まない相手と結婚してほしくないし！ 俊輔だってそう思ってると思うよ？」

そんな話をしていると、玄関のドアが開く音がした。

「ただいま」

「あら、噂をすれば、俊輔がご帰還だわ」

「あ、おとうさんだ！ おかえり！」

翔は椅子から転がり落ちる勢いで駆け出し、ダイニングに入って来たスーツ姿の俊輔の腰に抱きついた。彼は鞆かばんを床に起き、息子を高く抱き上げる。

「翔く、ただいま〜！ いい子にしていたか？ ……あ、依里佳、うちの部長の息子さんが、おまえをどこかで見かけて気に入ったそうで、是非紹介してくれて言われたけど、断っておいたぞ」

「あ、ありがとう……お兄ちゃん」

兄夫婦の双方から似たような話を立て続けに振られ、依里佳は苦笑する。

「つたく、どこで俺の妹だって知ったんだか。いきなり部長に会議室に呼ばれて驚いたわ」

「えく、俊輔ってば勝手に断っちゃって。一応依里佳ちゃんに確認するくらいはしなさいよ。私だってちゃんと聞いてるのに」

「だってな、その部長の息子、職場でも噂になるほどダメ息子って有名なんだよ。とにかく金にも女にもだらしないって。だから『妹はアメリカの有名投資家のご子息に見初められて婚約中です』って、断っておいた。そう言えばさすがに諦めるだろ。大事な妹をそんなるくでもないやつと引き合わせたら、あの世の父さんと母さんが化けて出そうだもんな」

「お兄ちゃん……いくら何でもその嘘は、あまりにも現実離れしすぎ……」

陽子の身内や俊輔の知人にも依里佳の美貌のほどは伝わっているらしく、見合い話や紹介してほ

しいという依頼がしばしば舞い込んで来る。中にはいい条件の相手もいるのだが、実際に会ってみると、例によって相手が依里佳の見た目と中身のギャップに困惑して、話が立ち消えになってしまうのだった。

何回かそういうことがあって以来、俊輔と陽子が見合いの前に盾かたになってくれている。必要とあらば依里佳の性格や嗜好しこうを相手側に説明し、見た目から想像するような女性ではないことを伝えてくれるのだ。

ほとんどは本人の代わりに断りの返事を伝えるだけなのだが、それをいとわず請け負おってくれる兄夫婦に、依里佳は頭が上がらなかつた。

「こんなもんかな……」

鏡に映る自分の顔を見て依里佳は呟つぶやいた。

化粧一つ取っても、かなり気を使う。何故なら、素顔に近いような薄化粧で会社に行けば『すっぴんでも美人だって言いたいのか？』と嫌味を言われ、しつかりメイクで行けば『ケバい』と嘲笑ちやうしやうされるからだ。もちろん、例の三女子に。

気にしなければいいのだが、あれこれ言われるのも面倒くさい。だからいろいろ勉強して腕みがを磨いた。ケバくもなく手抜きでもない、ちょうどいい具合のメイク術。

なので会社に入ってから、メイクの腕は格段に上がった。その点については、彼女たちに感謝してもいいかもしれない……と、依里佳はポジティブに考えるようにしていた。

身支度を済ませてリビングへ行くと、スーツ姿の陽子が慌ただしく動き回っていた。

「ごめんね、依里佳ちゃん。翔のこと、お願いね」

「大丈夫だよ、ちゃんと幼稚園まで送るから、行ってらっしゃい」

在宅勤務をしている陽子だが、クライアントと会うために外出することも多い。場合によっては今日のように朝早く家を出なければならぬこともあり、そういう時は俊輔や依里佳が送り迎えをしている。

陽子が出てから三十分ほど経った頃、依里佳は翔に声をかけた。

「翔、幼稚園行くよ」

「わかったあ」

飼育ケースの中を覗いていた翔は、名残惜しそうに蓋を閉めた。

翔は幼児番組やアニメも好きだが、何より好きなのが爬虫類だ。三歳の頃には庭でトカゲを捕まえては飼育ケースに入れて観察をしていた。

動物園に行けば爬虫類館に入り浸り、専門のペットショップへ行けばイグアナやカメレオンを買ってくれと駄々を捏ねる。

そんな翔は、今はジャックとアニー——一週間ほど前に捕まえてつがいで飼育しているカナヘビに夢中だ。メスのアニーが昨日卵を産んだので、大喜びで世話をしている最中なのだ。食べ終わっ

たプリンカップに土を入れ、そこに卵を隔離している。

『カナヘビのたまごは、おみずをあげなきゃいけないんだよ』

どこで覚えてきたのかそんなことを言い、定期的にたつぶりの水で土を湿らせていた。

さらに翔は毎晩寝る前には凶鑑を眺め、枕元に置いて寝ている。知識をどんどん吸収していくため、依里佳はそろそろ翔の爬虫類フリークぶりについていけなくなりつつあった。

爬虫類は別に苦手じゃないが、でも大好きというわけでもない。翔がいなければ興味なんて持たなかったし、カナヘビのオスメスの区別すらつかなかったと思う。今やすっかり判別可能な上に、素手で触ることも出来るわけだが。

こんなことに慣れてしまった自分に苦笑してしまうけれど、可愛い甥っ子のためなら仕方がない。翔はカナヘビに『いつてきまーす』とあいさつをし、それから手を洗って依里佳のもとへ来た。

さくらはま幼稚園は蓮見家から徒歩三分ほどのところにある。だから翔は園バスを利用せず、歩いて通園していた。

「おはようございますー」

園庭を掃除している職員に挨拶をし、それから昇降口へと入る。そこはすでに登園している園児で賑わっていた。

「翔くん、おはよう」

翔の担任が、他の園児の身支度を手伝いながら声をかけてきた。

「かなみせんせい、おはよう！」

「かなみ先生、おはようございます」

「おはようございます。今朝は依里佳さんが送り担当なんですね」

「はい、よろしくお願います。……じゃあね、翔。いい子にするんだよ？」

「じゃあねー、えりか！」

翔が入園してから、依里佳は園の行事に出来る限り顔を出していた。可愛い甥っ子の幼稚園での姿を見たかったのもあるけれど、何より翔の保護者の一人だと周囲に認識してもらいたかったから。その甲斐あって、今では幼稚園の教職員のほぼ全員が依里佳を翔の保護者であると理解してくれている。

「蓮見さん……！」

園の職員に会釈をし、園庭の門から外へ出てそのまま会社へ向かおうとしたところで、後ろから声をかけられた。

「副園長先生、おはようございます」

さくらはま幼稚園の副園長、関口曜一朗がそこにいた。急いで追いかけて来たのか、少し息を切らせている。

「蓮見……依里佳さんがいらしていると伺ったので……！」

依里佳は追いついた関口の息が整うのを待った。

「何かご用ですか？ 翔が何か？」

「いえ、翔くんはとつてもおりこうですよ。いつも元気ですし、他の子にも優しくて頼りになりま

す。……とつと、そうではなくて。実は依里佳さんにお願いがありまして」

居住まいを正して関口が言う。

彼は園長の息子で、言うならば次期園長だ。年は三十に届くか届かないくらいか。品のよい美形である上、眼差しや物腰がいつも柔らかく、包容力のあるタイプに見える。襟足が隠れる長さに整えられた焦げ茶の髪はサラサラで清潔感があり、それがまた彼の上品さを引き立てていた。背もかなり高いので、園長に高所の作業をよく頼まれているらしい。

当然、教職員や保護者からの人気も高い。独身の職員やシングルマザーの中にも、本気で彼を狙っている女性は少なくないと、依里佳は園ママから聞いたことがあった。

関口は幼稚園教諭免許を持ちながらも、元々は他に会社を営んでいた実業家らしい。園を学校法人化するに当たり、理事長や園長に乞われて幼稚園経営にも加わったとか——どこからそんな情報を仕入れてくるのか、園ママから聞かされるたびに依里佳は脱力してしまう。

「何でしょう？」

「今度、園の課外活動で合気道を始めたいと考えているんです。依里佳さんは以前合気道を習ってらしたと伺ったので、もし講師に心当たりがあればご紹介いただけませんかと思ひまして」

課外活動とは、放課後に園の設備を提供して行うお稽古ごとのことだ。講師は外部から招き、生徒はもちろん、さくらはま幼稚園の在園児や卒園生が対象になる。

思いがけない申し出に依里佳は一瞬目を丸くしたが、すぐにうなずいた。

「そうですね……じゃあ、私が教わっていた師範に聞いてみます」

確かに依里佳は、高校生の時まで合気道を習っていた。陽子か俊輔に聞いたのだろうか。
「それで……そのことに関するやりとりもしたいので、もしよろしければ携帯番号とかメッセージアプリのIDを教えてくださいませんか？」

「はい、かまいませんよ」

依里佳はバッグからスマートフォンを取り出して、関口と番号の交換をする。

「合気道のことだけじゃなく……個人的な内容を送ったりしてもいいですか？ 世間話とかそういうった類の」

関口が少しばつが悪そうに尋ねた。

「あはは、いいですよ。律儀ですね、副園長先生」

メッセージのやりとりをするのに、わざわざ内容の許可を取るなんて。彼の礼儀正しい人柄に、思わず笑みが浮かぶ。

「ありがとうございます。依里佳さん、これからご出勤ですよね？ すみません、朝のお忙しい時にお引き止めして。行つたらっしやい、お気をつけて」

依里佳は優美な笑みを浮かべた関口に送り出された。

出社すると、三女子が待つてましたとばかりに嫌味を連発した。もちろん、課長たちにはバレないようにこつそりと、だ。

「重役出勤なんて、余裕あるよねえ」

「夜遊びしすぎて寝坊したんじゃない？」

「いいよねえ、美人は遅れて来ても何も言われなくて」

「昨日の内にフレックスタイム出社の申請をして、勤務予定表にもそう入力しておいたんです……ご存知なかったようで失礼しました」

依里佳は一応、やんわりと反論はしておいた。それが彼女たちに響いているのかどうかは別として。

（つていうか、私にあれこれ言うヒマがあるなら仕事してほしいわ、ほんとに……）
仕事を中断したり課を越えてまで顔を出したりして嫌味を言いに来る価値が、私にあると思っっているのかしら——依里佳は首を傾げた。

とはいえ、いつまでも気にしていても仕方がないので、自分の仕事に集中することにする。客先に向いている同僚からの電話を受けてデータを送ったり、企画の草案を練ったり、関係部署から回ってきた報告書に目を通したりと忙しく働いていると、声をかけられた。

「蓮見さん、これだけど。確か企画二課が競合相手について割と綿密に調査していたから、資料借りてきて参考してみるといいかも」

「あ、はい、分かりました」

営業企画一課の課長・橋本は、依里佳のことをよく理解して普通に接してくれる数少ない男性である。過去に三女子の言動を知り、彼女たちに注意しようとしてくれたのも彼だ。

しかし彼女たちが『課長までたらし込んで』などと吹聴し始めたため、依里佳は橋本に、自

分を庇^なつてくれなくていい、と申し出た経緯があった。

依里佳は席を立ち、営業企画二課へと向かう。二課にはミッシェルがいる。声をかけたところで昼休みのチャイムが鳴ったので、美沙も誘って食堂へ移動した。

「へえ、水科くんって依里佳と同じ駅だったんだあ」

「ん」

「企画一課の有名人二人が同じところに住んでるとか知られたら、また誰かさんたちの格好の餌食^{えじき}になりますなあ、依里佳」

日替わり定食の焼きサバを口にしながら驚くミッシェル、オムライスを頬張りながら頷く依里佳、チキンカレーを掬^{すく}いながらからかう美沙——この三人が仲良くなったのは、新人研修の時だ。

依里佳はその頃にはすでに有名人と化していた。それはミッシェルも同様で、顔を合わせた瞬間に同類であることを感じ取った二人は、『同志よっ！』と、固く抱きしめ合ったのだった。

美沙は顔の造作では二人に及ばないものの、スタイルのよさは同期一で、特にGカップの胸は男性だけでなく、女性の注目も集めている。ウエストがきゅつとくびれ、ラテン系女性のような美尻を誇っているため、三人の中でもっともいかがわしい視線を受けてしまっていた。

しかし美沙はそんなことには慣れっこ、といった様子で気にする風でもない。三女子から嫌味を言われても、『私のスタイルのよさがあなた方に迷惑をかけたかしら？』と言い放ち、彼女たちを黙らせていた。それを見た依里佳とミッシェルが、美沙を師匠と仰^{おぼ}いで懐^{なつ}く形になったのも当然の流れである。

それから二年経ち、ミッシェルは今ではだいぶ美沙に感化され、見た目で何かを言われても、『はいはい、嫉妬^{しつとお}乙^お！』くらいは返せるようになったし、三女子にも嫌味で対抗出来るようになった。

依里佳はまだミッシェルほど開き直れてはいないものの、そこそこの反論なら出来るようになり、屋上でストレス解消することも覚えたためか、滅多に凹^へむことがなくなった。

「——ねえねえ知ってる？ 企画一課の水科くんがうちの持株会社の社長の息子だつて噂があるの」

突如として三人の耳に入ってきたこと。女性社員たちが、食事をしながら噂話を始めたのだ。

「え、そうなの？ でも社長の名前って『海堂^{かいどう}』でしょ」
女性社員の一人が尋ねる。

依里佳たちが勤務する会社は『海堂ホールディングス』傘下の『海堂エレクトロニクス』というIT企業だ。ホールディングス現社長は海堂義孝^{よしたか}といい、創業者の孫に当たる。

「でも海堂社長と水科くんってどことなく似てるから、実は隠し子なんじゃないか、って」
「マジでえっ？」

「あ、でも誰かが水科くんに聞いてみたら、笑って否定されたって」

「だろうねえ。仮に隠し子っていうのが本当だとしても、聞かれて認めるわけないじゃん」

「何かその話、嘘くさーい」

「まあ、あくまでも噂、だからね」

「ねえねえそれより！ 今日ね、技術研の織田さんが来てたよ。相変わらずイケメンだったよ」
女性社員たちは、何事もなかったかのように次の話題に移っていった。

それを黙って聞いていた依里佳たちは、顔を見合わせて苦笑する。

「水科くんも大変だよねえ……」

三人が同時に呟いた。

「あ、そうだ。依里佳に言わなきゃと思ってたことがあったんだわ」

美沙がパン、と手を合わせて切り出した。

「ん？ どうしたの？」

「この間、弟がスマホゲームやってて、私に画面を見せてくるから何かと思ったら、そのゲームキャラが依里佳に激似でさあ！ 思わず弟にスクショ送ってもらっちゃったわ。見て見て」

美沙がスマートフォンアプリを開き、弟から送られたという画像を拡大した。

「あれまあ、ほんとそっくり」

ミッシェルが目丸くする。

そこにいたのは、ロココ調ドレスを身につけて、レースをふんだんに使ったパラソルを手にしたCGキャラクターだった。

たれ目がちの大きな瞳、左目の下の泣きぼくろ、ダークブラウンのショートボブヘア——依里佳とまったく同じパーツを持つ少女が、そこにいた。自分でも納得のそっくり具合いだ。

「わ、ほんとに似てる……」

「でき、聞いて驚け、このキャラの名前、東雲エリカ（しののめ、いりか）って言うらしいの。しかも女王様キャラだからってことで、ファンからは『エリカ様』と呼ばれているらしいわ」

「あーら、名前まで一緒なのに性格は全然違うねえ。ねえ？ エリカ様？」

「ちよつとやめてよ、ミッシェル」

依里佳はからかってくるミッシェルの腕をつついた。

「まさかとは思うけど、あんたがモデルとかじゃないわよね？」

「そんなわけないでしょ」

美沙の問いを一笑に付した後、依里佳はふと黙り込んだ。

（エリカ様、ねえ……。あ、そういえば……）

ふと彼女の脳裏に、何ヶ月も前の出来事がよみがえる。

昨年の秋のことだった。『りゅうちゅさ』のきぐるみイベントが都内で開催されるということで、依里佳も翔を連れて出かけていた。人気声優が出演するとかで、会場は声優ファンであふれ返り、ほんわかした世界観の作品にしては、随分と熱狂的なイベントだったのを今でも覚えている。

何とか翔を守りつつ最後まで観覧していたのだが、隣に立っていた中学生くらいの女の子が帰ろうとする人の波に押されて転んでしまったのだ。依里佳はとっさにその子を助け、普段から翔のために持ち歩いているファーストエイドキットで、彼女の擦りむいた膝の応急処置をしたのだった。

その時の女の子が呆然としながら『エリカ様……』と呟いていたのを思い出す。初めは自分が呼ばれたのかと思っただが、名前は教えていないはずだし、ましてや初対面の相手に『様』なんて敬称

をつけて呼ばれる覚えもなかった。だから気のせいだと思って聞き流したのだけれど。

(もしかして、あの時の子も『エリカ様』のファンだったのかなあ……)

確かとても可愛らしい子だったと記憶している。

ゲーム自体に興味はなかったが、自分に似ているキャラがいるならちよつとやってみようかな——などと考えつつ、昼食を済ませた依里佳は、ミッシェルに借りた資料を抱えて部署に戻った。

「蓮見さん、渡し忘れた資料があるって、松永さんから預かってきました」

彼女の後を追うように、水科がクリアケースに入った書類を持ってやって来た。

「あ、ありがとう、わざわざごめんね」

「いえいえ、全然わざわざありませんよ。二課に用事があつて行ったら、松永さんに捕まっただけです」

「あはは、それは運が悪かったね」

「松永さん、ああ見えて力強いんですもん、ネクタイ引つ張られて首が絞まっちゃいましたよ」

「あー、ミッシェルは空手やってたからねえ」

職場で男性社員とこんな風に和気あいあいとした会話を交わすのは、何ヶ月ぶりだろう。昨日、水科が『どんどん声かけてください』と言ってくれたので、それに甘えて普通に会話を続けてみたのだが、やってみると意外と解放感があり、いい気分転換になった。

三女子内の二人が背後からこちらを睨めつけているのが、見なくても分かる。けれど、彼女たちを気にして萎縮するのなんだから違う気がして。

少しずつ、普通の状態に戻していけたらいいな、と思う。

——思っではいたのだが。

「媚売こひっちゃって、いやらしいの」

「水科くん、可哀想〜」

ぼそりと呟つぶやく声が入って来て、思わずため息がこぼれる。

(……はあ、私もまだまだ修行が必要だわ)

仕事を一段落させると、依里佳は席を立てて倉庫に向かった。一番奥の棚に隠された扉をぐぐって鉄骨階段を上り、屋上に通じる扉を開ける。どっと風を受けながら外へ出て、いつもの場所へと足を運んだ。すると——

「あれ……」

誰もいないはずの屋上に見えた人影は、紛まじうことなき、水科だった。

「どうして……」

棚を動かした形跡はなかった。彼は一体どこからここへ辿り着いたのだろう。

水科は無言のまま目を閉じていた。両手をポケットに入れ、吹いてくる風を一身に受け続けている。普段の愛想のいい水科篤樹は、そこにはいない。物憂ものうげで、どこか傷ついているような、儂はかない雰囲気ふんいきを漂たなわせている。

彼に声をかけられず、依里佳はしばらくその場に立ち尽くしていた。そしてハッと我に返り、そのまま立ち去ろうと後ずさりをした途端、水科がこちらの動きに気づいた。

「蓮見さん？」

「……あ、ご、ごめんね、邪魔しちゃって。み、水科くんがいるなんて、思わなかったから！」
(決して後をつけて来たわけじゃないから！ ストーカーじゃないから！ 偶然だから！)

そう大声でさげびたかったが、かえって言い訳がましくなりそうな気がしてやめておいた。

「——あ……っと、お邪魔だから、私、行くね？」

「気を遣わなくても大丈夫ですよ、蓮見さん」

きびすを返そうとすると、水科に呼び止められた。

「蓮見さんもストレス解消に来たんですか？ ここ、いいですよ。誰も来なくて」

風を浴びながら水科が笑う。その表情は、やっぱりいつもの笑顔とは違っていた。昨日の駅で見
た表情とも異なる、無色透明な笑みだ。

(疲れてる……のかな)

「水科くんも、ストレス溜まるんだね」

少し失礼かな、とも思ったが、尋ねてみた。

「そりゃあ、俺も人間ですから。……っっていうか、愛想よくし続けるのも、実はちょっと疲れるんですよね。……きつと蓮見さんなら、こういうの分かってくれると思うんですけど」

「そう……だね」

水科の言いたいことが痛いほど分かった。おそらく彼は普段、愛想のいい水科篤樹を演じている
のだろう。そうするには何らかの理由があると思うのだが、さすがにそこまで踏み込むわけにはい

かない。

依里佳も昔は器に見合う自分を演じようとしたことがあったから——どうしたって無理だと分
かったので、結局やめてしまったけれど。

「でも、半ばクセみたいになっちゃってるんで、今さらやめられないんですけどね。だから時々、
ここで風と日光に当たってストレス解消してるんです」

「水科くんは、どうやって屋上に入ってきたの？」

依里佳と同じルートから来た形跡がない以上、他にも辿り着く方法があるはずだ。水科はどう
やって屋上まで来ているのか、気になった。

「これです、これ」

水科は首から下げていたIDカードケースを裏返しにして、振ってみせる。そこには、一本の鍵
が入っていた。

「鍵……？ それって、屋上の？」

「そうです。……入手ルートは内緒、ですけど」

肩をすくめながら、水科が悪戯っぽく笑った。

「本来の、正規の通路から来てる、ってことなのね」

『——ねえねえ知ってる？ 企画一課の水科くんがうちの持株会社の社長の息子だって噂があ
るの』

依里佳はふと、先ほど女子社員が話していたことを思い出す。

もしかしたら、それは案外当たらずとも遠からずで、そのコネで鍵を入手したのだろうか——ほんの少しだけ、そう考えてしまった。

(だめだつてば！ 下手な噂は信じちゃいけないんだから) 心の中で自分を戒める。

依里佳自身、根も葉もない噂で悩まされることが多いので、そういった根拠のない話は信じない、信じてはいけないと、常に自分に言い聞かせていた。

「昨日から、蓮見さんと俺、縁がありますね」

「そ、そうだね。偶然が続いちちゃったね！」

確かにここ二日間、水科と遭遇する機会が多かった。今まであまり接触がなかったこともあり、急に水科との距離が縮まった気がする。

「嬉しいな、なんだか蓮見さんとの距離が縮まった感があつて」

「っ」

今まさに考えていた内容とまったく同じことを言われ、思わず肩を震わせてしまった。

「あ、ありがとう。そう言ってくれと、私も嬉しい」

慌てる依里佳を見て、水科が笑う。

(あ……昨日と同じ)

無色透明だった笑顔が一気に色づいた。駅で見たあの笑みだ。依里佳を搦め取るほど引力のある瞳で見つめてくるから、凶らずも心臓が高鳴ってしまった。

「——蓮見さん、ここ、二人だけの秘密にしましょうね？」

そう言つて水科が、人差し指を自分の口元に添えた——年下とは思えない色気を全身にまとわせるながら。

第二章

「翔くん、いらつしやい。新しいカメレオンが来たんだよ。見てみる？」

「うん！」

たくさんの爬虫類に囲まれた翔は上機嫌だった。

土曜日、陽子がクライアントと会う用事が出来たので、俊輔と依里佳が翔の面倒を見ることになった。翔に出かけたいところがあるか聞いたところ、『ペットショップ！』と即答され、こうして三人で連れ立って来たというわけだ。と言っても、ここは可愛らしい仔犬や仔猫がショーケースでコロコロ戯れているような、ファンシーな場所ではない。

トカゲ、イグアナ、ヘビ、ヤモリ、カメなどがひしめき合う、爬虫類を扱うペットショップだ。

その名もズバリ『レプタイルズ』、英語で爬虫類という意味だ。蓮見家から車で五分ほどのところにある店で、爬虫類の他には両生類や珍しい虫なども置いている。隣には哺乳類を販売している系列店も併設されていて、おそらく普通の人にとってはそちらがメインなのだろう。

しかし依里佳たち——というより翔にとっては、犬猫よりもトカゲが可愛く見えるらしい。一度俊輔が『翔、動物飼いたいなら犬か猫はどうだ?』と聞いてみたところ、『やだあ。おれ、イグアナかカメレオンがいい!』と、一蹴^{いっしょく}されている。

もはや翔の爬虫類好きには、家族すらもついていけなくなりつつあった。

「依里佳、おまえ買う物あるんだろ? 翔は俺が見てるから、先に買いに行つて来ちゃえよ!」

「うん、分かった。じゃあ私、モールに行つて来るけど、どこで待ち合わせする?」

「……どうせ翔は一、二時間は動かないだろ? ここにいるよ、多分!」

俊輔が少しげんなりとした表情を見せた。

レプタイルズは翔のオアシスとも言うべき場所で、月に二、三度は通っている。まったく飽きないようで、一度入ると数時間はてこでも動かない。

店長も翔を常連と認めてくれており、いつも快く迎えてくれる。おまけに展示されている生き物たちを触らせてもくれるのだから、翔がここに入り浸^{びた}ってしまうのも仕方ないだろう。

今も店長が見せてくれるヨッツノカメレオンに夢中な翔は、依里佳に見向きもしない。それはそれで少し淋^{さび}しいが、この間に必要なものを買に行こうと、二人を置いて車を走らせた。

ショッピングモールへ着くと、まずは自分の服を見て回った。派手好きではないものの、やはり依里佳も女性性である。おしゃれには興味があり、月に一度は新しい洋服を買うことにしていた。

ショップへ行くと、店員からは必ずと言っていいほど派手めなものを薦^{すす}められるが、依里佳自身

はフェミニンな服装が好きだ。だから柔らかい印象を与えるもので、かつ、自分に似合うものを慎重に選ぶ。

依里佳は何十分も迷った末に、白いリボンブラウスと、薄いブルーの大花柄のフレアスカートを買った。

それから陽子に頼まれた雑誌と、自分が毎月購読している雑誌を本屋で購入し、その後は夕飯の材料を見繕^{みつくろ}う。今日の夕食は翔のリクエストで、煮込みハンバーグにするつもりだ。

両親が他界してからの二年間はほとんどの家事を一人で請^うけ負^おっていたので、依里佳は料理もそこそこ出来る。陽子がいない時の食事担当は依里佳で、翔も彼女が作った食事を美味^{おい}いと言ってくれるのが嬉しい。

両手に大荷物を抱えて車に戻ると、再びレプタイルズに向かった。

店内では、翔が何故か飼育ケースに入ったカブトムシを持ってはしゃいでいた。

「えりか! みてみて! カブトムシもらったあ!」

「どうしたの? それ!」

「店長が知り合いからたくさんもらったとかで、翔にもくれたんだよ。まったく、カナヘビもいるつていのに……!」

俊輔が苦笑しながら大きな袋を掲^{かか}げてみせた。カブトムシ用の腐葉土^{ふようど}とエサのゼリーが入っているようだ。

(あはは、買わされたんだ)

「いつもほとんど何も買わずに入り浸^{びた}ってるんだから、せめてこういう時くらいはお店に貢献しないと、お兄ちゃん」

翔は来店するたびに『イグアナかいた〜い!』『カメレオンかた〜!』と駄々を捏^こねるけれど、俊輔と陽子が『小学校に入るまではダメ』と言いつつ聞かせ、今は見るだけに留めさせていた。

「翔く、そろそろ帰るぞ〜」

俊輔は痺^{しび}れを切らしているようだ。

「もうちよつとまって〜、さいごにカメみてくる〜。えりか、これもつてて!」

翔はカブトムシを依里佳に押しつけると、カメのコーナーへと向かった。

「あ、翔! 待って!」

依里佳は慌てて翔の後を追う。そして一つ先の展示棚を曲がろうとした時――

「……え?」

棚に挟まれた通路の奥に、見知った姿を発見した。

(水科くん!?)

カメレオンのコーナーに、水科が立っている。いつも会社で見るようなスーツ姿ではなく、アウトドアブランドのTシャツにハーフパンツというカジュアルな服装ではあったけれど、間違いない。彼だ。意外な場所で意外すぎる顔を見かけて驚き、依里佳は慌てて棚の陰に隠れる。

(べ、別に隠れなくてもいいのに、私……)

こここのところ続く偶然に心がざわついてしまい、普通に声をかけられなかった。

(つていうか、今度こそストーリーカードと思われちゃったらやだ〜!)

見た目に反して小心者の依里佳は、そんなことを心配してしまう。

そこにいる水科はとても楽しそうだ。どうやら連れはいないようで、一人でショーケースを眺めている。もう一度そつと覗^{のぞ}いてみると、水科はエポシカメレオンのケースに顔を近づけ、ニコニコと笑っていた。

思わず口元に手を当てて息を呑む依里佳の後ろから、翔が心配そうに声をかけてきた。

「えりか……? なにしてるの?」

「つ、あ、な、何でもないよ? もう帰ろう? お父さん待ちくたびれてるみたいだから」

依里佳は翔の手を取り、急いで出口へと向かう。俊輔はすでに車の運転席へと座り、エンジンをかけて待っていた。翔は嬉しそうにカブトムシのケースを抱えてチャイルドシートへ乗り込む。

家に向かう車の中で、依里佳は水科の姿を思い返していた。

カメレオンを見ている時の表情、それは彼女が翔を見る時に似た笑顔だった――可愛いものを目にするのと自然と顔がほころんでしまう、というやつだ。

あんな特殊な店で笑ってショーケースを見ている理由なんて、一つしか思いつかない。

もしかして……もしかしなくても。

(水科くんって、爬虫類^{はちゅうるい}が好きだったりする……?)